

序 章

ポスト・マハティール時代の解説にむけて

中 村 正 志

本書のねらい

マハティール・モハド首相退任後のマレーシアについて、政治と経済の総合的なイメージを提供すること。これが本書の全体を通じてわれわれがめざす目標である。ここ数年、日本の企業やマスコミの方々と話をした際に、マハティール元首相が退任した後のマレーシアは印象が薄くてイメージがわからないという指摘をしばしば耳にした。こうした声に研究者の立場から応答したい。2003年10月にマハティールが首相を退任してから今日までのあいだに、政治面でも経済面でも重要な変化が生じた。本書では、誰が何を変え、何が変わらなかったのかを整理し、なぜ変わったのか（変わらなかったのか）を探求する。この作業を通じて、いまのマレーシアの政治経済状況を総合的に把握するのがわれわれの目的である。

1981年から2003年まで首相を務めたマハティールは、日本で例外的に高い知名度を誇るマレーシアの政治家である。彼は日本経済新聞の名物企画「私の履歴書」に初めて登場したアジアの政治家であり⁽¹⁾、毎日新聞に連載コラムをもっていたこともある⁽²⁾。

日本でマハティールの知名度を高めたのは、第1にその外交政策である。経済発展のモデルを日本に求めたルック・イースト政策や、石原慎太郎衆議院議員（当時）との共著『「NO」と言えるアジア』（マハティール・石原 1994）

などにみられる反欧米・アジア重視の姿勢が関心を集めた。第2に、マハティール時代のマレーシアは日本の家電メーカーや半導体メーカーの一大生産拠点となり、日本との結び付きを通じて高度成長を実現したことで注目された。第3に、マハティールはメディアや労働組合、NGOを抑圧し、政敵の逮捕も辞さない強権的な政治家として悪名も高かった。ひとことで表すなら、マハティールには「親日的な辣腕政治家」というイメージがあり、マハティールの「リーダーシップ」を賞賛する者と「独裁」を批判する者のどちらもこのイメージを共有していた⁽³⁾。

学術研究においては、マハティール政権は開発主義、開発体制の一例とみなされた。開発主義とは、経済成長を何よりも重視し、そのために国家による資源の管理・動員と社会統制を認めるイデオロギーである。一方、開発体制とは国家主導型開発を実現するための統治制度を指す（岩崎 1994; 末廣 1998; 堀金 2004）。マハティール政権は、開発政策実施のための行政機構を整備し（鳥居 2003; 2006）、国営製鉄会社や国民車メーカー・プロトン社を設立したほか、高速道路網の整備やクアラルンプール国際空港の建設、行政都市プトラジャヤの開発などいくつもの巨大事業を手がけた。

開発を進めるにあたり、マハティール政権は労働運動を規制したほか、環境破壊を告発したNGOを抑圧するなど、強権行使も辞さなかった。くわえてマハティール政権は、経済開発の担い手としてブミプトラ（先住民）の企業家を育てようとしたが、この政策は与党幹部に近い人物がコネを生かして利益を得る縁故主義を悪化させた。

マハティール政権中盤の10年にわたる高度成長を経て、マレーシアは1997年にアジア通貨危機に見舞われる。政府が育成したブミプトラ企業が破綻したほか、与党・統一マレー人国民組織（UMNO）内部の権力闘争が激化してアンワル・イブラヒム副首相の解任、逮捕にいたるなど、通貨危機を契機に開発体制の負の側面が顕著に表れた。政権末期のマハティールは、経済危機と政治危機への対応に追われる。経済的には金融機関の再編や不良債権の処理、政治的には与党 UMNO の立て直しに筋道をつけたところでマハティール

ルは首相の座を退いた。

光と影を併せもつマハティール時代の政治経済体制を、開発主義、開発体制という枠組みを通じてわれわれは総合的に把握することができた。この枠組みの中心に位置したのは、政策の決定権を牛耳っていたマハティールである。マハティール時代を総括した Welsh ed. (2004) は、マハティールの影響力がいかに広範囲に及んだかを示している。46章からなるこの本では、国内政治と経済、外交にくわえ、教育、メディア、文化、宗教、都市、移民、ジェンダーなど多様なトピックが扱われている。そのすべてにおいて、良きにつけ悪しきにつけ、マハティールがメインアクターとしてかかわっていたのである。それゆえマハティールのことばと行動を追えば、その時々の政治と経済の状況と政府の対策を大づかみに把握することができた。Khoo(1995) はマハティールの政治経済思想を読み解き、彼が誰といかなる論争を繰り返したかを跡づけることを通じて、マハティール政権前半期の政策と政局の展開を活写した。

だがこのような時代はもう終わった。マハティールが政策決定過程の要の位置を退いてからすでに14年もの年月が経過している。では、われわれがいま目にしているポスト・マハティール時代とはいったいどのような時代なのだろうか。

先行研究

マハティール首相退任後の政治や経済を扱った書籍は、マレーシアで多数出版されている。だがその多くは、政党政治や選挙、新経済政策（いわゆるブミプトラ政策）など、特定のイシューに焦点を絞った論考である。本書の問題関心に照らしてとくに重要な文献は、マレー人政党である UMNO と汎マレーシア・イスラーム党 (PAS) との競合を分析した Gomez ed. (2007)、野党が躍進した2008年総選挙を扱った Ooi, Saravanamuttu and Lee (2008) や Tan and Lee eds. (2008)、2013年選挙の投票結果を分析した Saravanamuttu,

Lee and Mohamed Nawab eds. (2015), 新経済政策を批判的に検討した Gomez and Saravanamuttu eds. (2013), 格差問題を扱った本書9章の著者の著作 Muhammed (2014) などである。これらの文献には必要に応じて、関連するトピックを扱う章で言及する。ここでは、アブドラ政権期を中心にポスト・マハティール期の政治の特徴を論じた Muhamad Takiyuddin (2014) にふれておきたい。

マハティールの後継者であるアブドラ・バダウィが2008年総選挙を経て早期退任に追い込まれたのは、アブドラ陣営の新保守主義とマハティールを筆頭とする旧来型の保守主義との対立の帰結だとタキユディンは論じた。ここで保守主義とは、伝統を尊び社会秩序の現状維持を志向して平等化に抵抗するイデオロギーを意味する。一方新保守主義は、保守主義の流れを汲みつつ、環境の変化に適応するための改革を志向するものとされる。アブドラ政権は、成長が最優先だったマハティール時代の政策を是正し、農業の復興や地域開発の促進を図るなどバランスのとれた開発をめざした。政治的には批判を受け入れる姿勢を表明したため、改革志向のメディアや市民社会組織が台頭し、これを追い風に2008年総選挙で野党が躍進した。その結果、アブドラは党内守旧派から弱腰な姿勢を批判され、ナジブ・ラザクへの政権の禪譲を強いられた。

マハティール退任後の政策と政局の軌跡を、改革の試みとその挫折ととらえる見方はほかの文献にもみられる。「ポスト・マハティールのマレーシアをどう理解するか」と題したエッセイにおいて Ooi (2006, 35) は、シンガポールとの関係改善や大規模インフラ開発の凍結などアブドラ政権初期の政策について、「マハティール政権の行き過ぎや不作為、有害な副作用を是正する試みだと認識すべきだ」と述べた。改革に取り組む姿勢を新政権の特徴ととらえたのである。それから10年後に出版された『マレーシア・ポスト・マハティール』の編者は、守旧派のマハティールがアブドラ政権の「開かれた政治」やナジブ政権の新経済モデル（第6章参照）などの改革路線に反対したことを強調し、マハティールを「首相キラー」(PM slayer)と呼んでい

る (Chin 2015)。

本書もまた、改革の試みと挫折、反動という揺らぎをポスト・マハティール期の特徴ととらえ、主要政策の変遷を跡づけるとともに、揺らぎをもたらした要因を探る。

先行研究のなかには、政治、経済、社会に幅広く言及した著作もある。ひとりの著者が多様なトピックを扱ったものには、ウーイの一連の著作 (Ooi 2006; 2008; 2009; 2010) や Loh (2009) がある。どちらも新聞や雑誌に掲載したエッセイをまとめたもので、執筆時点のホット・イシューを扱っている。そのため時間軸を貫く解釈の枠組みは明示していないが、当時の社会の雰囲気をよく表しており、政治の自由化やガバナンスの改善、多文化主義的な政策への転換など、リベラル改革を求める機運が高まっていく様を描き出している。

複数の著者による論文集で幅広く社会問題を扱ったものには、Saw and Kesavapany eds. (2006) や Lemièrè ed. (2014), Chin and Dosch eds. (2015) がある。だがいずれも、政治経済の総合的な理解を目的とするものではなく、一見すると雑多なトピックを扱った論文集のようにみえる。これらの書籍に収録された論文が行っているのはおもに統治制度や政策の批判的検討であり、その目的は、Lemièrè ed. (2014) の裏表紙の推薦文に書かれているとおり、各々のトピックについて「もうひとつの物語」(alternative narratives) を提示することにある。

マレーシアでは言論の自由が十分に保障されておらず、新聞やテレビの報道は著しく政府・与党寄りに偏向している。政局や政策課題に関する主流メディアの報道は政府・与党の見解に沿ったものばかりで、野党や NGO による対抗言説に市民が触れる機会は限られていた。このような環境下でマレーシアの知識人は、統治のあり方や政策の妥当性をただし、代替策を提示するという社会的役割を積極的に担ってきた。かれらは、統制されたメディアを通じて流布される政府・与党の社会観や政策論に対抗し、「もうひとつの物語」を意識的に提供してきたのである。こうした活動は学術研究であると同

時に、言論戦を通じて与党 UMNO のヘゲモニーに対抗する政治的行為でもある。

一方、本書はもっぱら日本の読者に向けて日本語で書かれており、為政者相手の言論戦に加わることはわれわれの目的ではない。もちろん、政府・与党批判を主目的とする文献についてもその学術的な知見は参照する。だがわれわれ自身の目的は、社会科学の手続きをふまえて政治と経済を幅広く考察し、ポスト・マハティール時代の総合的なイメージを提供することにある。

本書の構成

かつてマハティールが先進国入りの期限目標に設定した2020年が近づくいま、マレーシアはどんな地点にいるのか。本書では、政治と経済の両面からそれを考察する。第I部では政治を、第II部では経済を扱い、全篇を通じて得られた知見を終章で総括する。いずれの章でも、マハティール時代とは何が変わり、何が変わらなかったのかを見定め、なぜ変わったのか（変わらなかったのか）を推論する。マハティール時代からの継続と変化について、客観的なデータと事実関係の緻密な検討を通じて推論を重ね、そうして得られた知見を組み合わせることでポスト・マハティール時代のイメージを導く。

第I部の政治篇では、まず、マハティール退任後の政治の展開を時間軸に沿って概観する（第1章）。政治篇の総論にあたるこの章では、アブドラ政権期に始まった政治改革が一進一退を繰り返したのち、第2次ナジブ内閣のもとで大きく反動に振れるという流れを示す。その過程で、次章以降の各論部で扱うトピックと、改革と反動のあいだを揺らぐ政治の流れとの関連を示す。

つづく第2章は政党システムの変容を扱う。2008年総選挙を機に与党連合・国民戦線（BN）の単党連合優位制が崩れた。BNと野党連合の人民連盟（PR）が並び立つ二大政党連合制が成立し、この政党システムのもとで改革への期待が高まった。ところが2015年にはPRが瓦解し、政党間関係が流動

化することになる。ここでは、2013年総選挙がもたらしたBNとPRの質的な変化が二大政党連合制の不安定化を招いたことを示す。

第3章では、政党システムの歴史的变化をもたらした選挙を詳しく分析する。2008年総選挙でBNが大きく議席を減らした要因を明らかにするとともに、2013年総選挙の前後に始まった改革から反動への路線転換に選挙対策の側面があったことを示す。

第4章は改革と反動のあいだで揺れた政治制度改革の展開を扱う。ここでは、首相が総選挙を意識したときに政治制度改革が進み、党内対策を優先すると反動に振れる傾向にあったことを示す。

第5章はポスト・マハティール期になって急速に活発化し、野党台頭の要因ともなった社会運動を扱う。動員力と政治的影響力をもっとも大きい「クリーンで公平な選挙を求める連合」(通称ブルシ)をとりあげ、ブルシがなぜ勃興し、その帰結として何をもたらしたのかを示す。

第II部・経済篇では、まず第6章でポスト・マハティール期の経済を概観する。マハティール政権期と比較し、経済構造の面では一次産品関連輸出の再拡大と内需の拡大、経常収支の黒字化がマハティール後の特徴であることを示す。経済政策の面では、ブミプトラ企業家育成から政府関連企業(GLC)重視への転換、ならびに成長重視から分配重視への転換がこの時期の特徴である。

各論部では、成長の担い手である企業と、成長のパイの配り方、すなわち分配の問題を重点的に扱う。

第7章では、ブミプトラ企業にかかわる政策の転換を扱う。マハティール時代のブミプトラ企業家育成策は通貨危機で行きづまり、主要なブミプトラ企業は再国有化された。ポスト・マハティール期には、政府保有のまま経営を改善するGLC改革プログラムが実施される。ここではGLC改革プログラムを概観し、その理論的妥当性を検証する。

第8章ではポスト・マハティール期に活発化したマレーシア企業の海外進出を扱う。2000年代半ば以降マレーシアから外国に向かう投資が急増し、海

外直接投資の流出額が流入額を上回った。本章ではグローバル化を果たした代表的な企業を紹介し、海外展開を促した要因を探る。

第9章では貧困と所得格差を扱う。新経済政策が導入されてから現在までに貧困率は大幅に低下し民族間の所得格差も縮小したが、民族内の格差は依然として高いことを示す。また本章は、既存研究がとりあげてこなかった資産格差の実態を明らかにし、所得よりも資産の格差の方が大きいことを示す。

第10章では、地域間格差の是正を目的とする地域開発政策の展開を扱う。マハティール政権末期以降、州政府は財政面で連邦政府への依存を深めている。そうしたなかでアブドラ政権は地域開発を重視し、5つの経済回廊の創出を計画した。本章では、これまでの政策の展開と成果を整理し、今後の見通しを示す。

最後に終章において、各章の考察によってもたらされた知見を総括する。ポスト・マハティール期の経済は、ペースは鈍ったものの堅調な成長が続き、上位中所得国から高所得国への移行が視界に入ってきた。ところが政治的には、民主主義とガバナンスの改善に向けた動きが鈍って反動に向かい、先進国の仲間入りにはほど遠い地点にいる。こうしたアンバランスな発展のあり方の是正を促す外圧も弱く、当面は現在の状況が続くと考えられることを示す。

[注] _____

- (1) マハティールの「私の履歴書」は1995年11月に連載された。1998年1月にはインドネシアのスハルト大統領、1999年1月にはシンガポールのリー・クアンユー元首相がとりあげられている。
- (2) 「どくとのマハティールの世界診断」とのタイトルで1999年2月から2000年6月にかけて掲載され、のちに書籍化された（マハティール2000）。
- (3) 賞賛派の例として坪内（1994）、批判派の例として林田（2001）を参照されたい。

〔参考文献〕

<日本語文献>

- 岩崎育夫 1994. 「ASEAN 諸国の開発体制論」 岩崎育夫編『開発と政治——ASEAN 諸国の開発体制』アジア経済研究所 3-48.
- 末廣昭 1998. 「発展途上国の開発主義」東京大学社会科学研究所編『20世紀システム4 開発主義』東京大学出版会 13-46.
- 坪内隆彦 1994. 『アジア復権の希望マハティール』亜紀書房.
- 鳥居高 2003. 「マレーシアにおける“開発”政策策定・実行メカニズム——マハティール政権を中心に」『法学新報』110(3-4) 8月 627-654.
- 2006. 「マハティール政権『イスラーム先進国・マレーシア』をめざした22年——その内容と枠組み」鳥居高編『マハティール政権下のマレーシア——「イスラーム先進国」をめざした22年』アジア経済研究所 25-68.
- 林田裕章 2001. 『マハティールのジレンマ——発展と混迷のマレーシア現代史』中央公論新社.
- 堀金由美 2004. 「『開発主義』の系譜——開発独裁, developmental state, 開発主義」『政経論叢』73(1-2) 9月 141-171.
- マハティール・モハマド 2000. 加藤暁子訳『アジアから日本への伝言』毎日新聞社.
- マハティール・石原慎太郎 1994. 『「NO」と言えるアジア——対欧米への方策』光文社.

<英語・マレー語文献>

- Chin, James. 2015. “A Decade Later: The Lasting Shadow of Mahathir.” In *Malaysia Post-Mahathir: A Decade of Change?* edited by James Chin and Joern Dosch. Singapore: Marshall Cavendish Editions, 16-40.
- Chin, James and Joern Dosch eds. 2015. *Malaysia Post-Mahathir: A Decade of Change?* Singapore: Marshall Cavendish Editions.
- Gomez, Edmund Terence ed. 2007. *Politics in Malaysia: The Malay Dimension*. London and New York: Routledge.
- Gomez, Edmund Terence and Johan Saravanamuttu eds. 2013. *The New Economic Policy in Malaysia: Affirmative Action, Ethnic Inequalities and Social Justice*. Petaling Jaya: Strategic Information and Research Development Centre.
- Khoo Boo Teik. 1995. *Paradoxes of Mahathirism: An Intellectual Biography of Mahathir Mohamad*. Kuala Lumpur and New York: Oxford University Press.

- Lemière, Sophie ed. 2014. *Misplaced Democracy: Malaysian Politics and People*. Petaling Jaya: Strategic Information and Research Development Centre.
- Loh, Kok Wah, Francis. 2009. *Old vs New Politics in Malaysia: State and Society in Transition*. Petaling Jaya: Strategic Information and Research Development Centre.
- Muhamad Takiyuddin Ismail. 2014. *Saga Neokonservatif: Abdullah Badawi, UMNO dan Konservatisme*. Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.
- Muhammed Abdul Khalid. 2014. *The Colour of Inequality: Ethnicity, Class, Income and Wealth in Malaysia*. Petaling Jaya: MPH Group Publishing.
- Ooi, Kee Beng. 2006. *Era of Transition: Malaysia after Mahathir*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- . 2008. *Lost in Transition: Malaysia under Abdullah*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- . 2009. *Arrested Reform: The Undoing of Abdullah Badawi*. Kuala Lumpur: Research for Social Advancement.
- . 2010. *Between UMNO and a Hard Place: The Najib Razak Era Begins*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Ooi, Kee Beng, Johan Saravanamuttu and Lee Hock Guan. 2008. *March 8: Eclipsing May 13*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Saravanamuttu, Johan, Lee Hock Guan and Mohamed Nawab Mohamed Osman eds. 2015. *Coalitions in Collision: Malaysia's 13th General Elections*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Saw, Swee-Hock and K. Kesavapany eds. 2006. *Malaysia: Recent Trends and Challenges*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Tan, Nathaniel and John Lee eds. 2008. *Political Tsunami: An End to Hegemony in Malaysia?* Kuala Lumpur: Kini Books.
- Welsh, Bridget ed. 2004. *Reflections: The Mahathir Years*. Washington, D.C.: Southeast Asia Studies Program, The Paul H. Nitze School of Advanced International Studies (SAIS), Johns Hopkins University.